

多様な研修における「多読ブック」作成の試み

和栗夏海・田中哲哉

1. はじめに

多読といえば、通常、学習者が多読用図書を読む活動であるが、本稿では、多読用図書である「多読ブック」を作成する活動について報告する⁽¹⁾。2019年度、国際交流基金関西国際センター（以下、関西センター）で実施したニュージーランドの中等教育段階の教員研修、オーストラリアの大学生研修、インドネシアの大学教員、および大学生の合同研修の3つの異なる研修において、多読ブック作成活動を取り入れた。この活動を通して、日本文化・社会への理解が深まったり、教材作成への理解や幅が広がることを期待し、それぞれの研修目的に合わせてプログラムに組み込んだ。本稿では、まず、本実践を行う背景として、関西センターでのこれまでの多読の取り組みを紹介する。続いて、研修ごとに、研修の概要と多読ブック作成の位置づけ、授業の流れとポイント、研修参加者の学びや気づきについて報告する。

2. 関西センターの多読の取り組み

関西センターでは、本実践の前から多読の取り組みを行っている。学習者が多読用図書を読む活動としては、2014年度からセンター内の図書館で月1回多読イベントを行いはじめ、多読を選択科目として取り入れる研修もあり、多読の学習効果や楽しさを目の当たりにしてきた。制作活動としては、2015年度から関西センター所属の有志の講師と司書が「KCよむよむ」の制作を開始し、これまでに計26冊（A1～A2/B1レベル）を公開してきた⁽²⁾。A2レベルの研修参加者のエッセイコンテストの作品を多読用図書にする試みも行っている。これらの活動を通して、馴染みのある文書作成ソフト Word を使って画像とテキストだけで簡単に作成できること、複数人で協働して作成しやすいこと、日本語力が低くても取り組める活動であることなど、制作についてノウハウや経験値を積み重ねてきた。



図1 「KCよむよむ」

そして、これらの読む活動や制作活動を支えているのが図書館である。図書館の一角には多読の特設コーナーがあり、販売されている多読用図書や関西センターで制作したものなど多数配架されている。研修参加者や講師は、いつでも気軽に様々なレベルやトピックの多読用図書

に触れることができる⁽³⁾。

3. ニュージーランドの中等教育段階の教員研修における実践

3.1 研修概要と多読ブック作成活動の位置づけ

ニュージーランドの中等教育段階の教員研修（以下、NZ 研修）は、ニュージーランドの中学校、および高校で日本語教育に携わっている現役の教師を対象に訪日体験を通じての教材収集や教授法の理解を主な目的とする2週間のプログラムである。2019年度は9月29日から10月12日まで実施された。2019年度は5名が参加した。研修参加者が教えている学習者はいずれも、初級レベルの中学生と高校生で、研修参加者自身の日本語レベルは、A2後半～B2程度と差があった。

NZ 研修では、主に以下の3つの理由で多読ブックの作成を研修の内容として加えることにした。

まず、全員に訪日経験があり、研修期間も長くないので、幅広く教材を収集するというよりも具体的な成果物を作成することで達成感を高めることができると考えた。たとえば、写真やレリアを多く収集しても、具体的にどれをどのように使用するかまで考えるには時間が必要である。それで、多読ブックという具体的なものを作ることで、利用方法についてもより具体的にイメージできるのではないかと考えた。

次に、日本語のレベルがそれほど高くなくても多読ブックは作成が可能な点である。これは関西センターでの他研修での経験から、初級レベルの学習者でも多読ブックの作成は困難ではないこと、また、以前の NZ 研修の参加者の一人が多読についての講義を聞いて2日ほどで1冊作成したことが判断の理由になった。

そして、センターの図書館でそれらの多読ブックを読むことができ、他に多くの多読用図書が閲覧できることから、作る本のイメージの形成と多様なアイデアも生まれやすいという環境もプラスになると考えた。さらに、研修開始前のニーズ調査で、複数の参加者が読解教材に関する情報収集などを希望していた。

多読ブック作成の授業の流れは、表1の通りである。

①では、関西センターで行われている多読授業のやり方で学習者として多読を体験してもらった。最初に本の読み方について、(1) やさしいレベルから読み始める、(2) 辞書を使わない、(3) 分からないところは飛ばして読む、(4) 進まなくなったら、ほかの本を読む、という4つのルールを紹介した。そして、好きな本を、好きな場所で読んでもらった。1冊読み終わるたびに、本の最後のページの袋に入れてあるコメントシートに簡単な感想を書く参加者もいた。

表1 多読ブック作成活動の流れ

	活動	時間	場所	内容
①	多読授業の紹介	2時間	図書館	・いろいろな多読用図書を読むことを自分で経験する。 ・多読の授業のやり方を学ぶ。
②	多読ブック作成活動説明	2時間	教室	・研修の目的であるリソース収集について異文化理解の観点から理解を深めるとともに、研修の成果として多読ブックを作成することを確認する。 ・授業で紹介した異文化理解の例をどのように多読ブックにするか、サンプルを見てアイデアを広げる。
③	リソース収集1	1日	大阪市内	大阪オリエンテーリングとして、実際に大阪市内を歩く体験をして、写真などのリソースを収集する。
④	リソース収集2	1日	京都市内	京都研修旅行で京都の町を歩いてリソースを収集する。 【宿題】多読ブックの構成を考えて原稿を書く
⑤	多読ブック作成	1時間	教室	実際に多読ブックを印刷、製本する。 【宿題】多読ブックを完成させる。印刷は講師がサポートする
⑥	発表準備	3時間	教室	PPTの作成など、発表の準備をする。多読ブックがまだ完成していない場合は、製本作業も行う。
⑦	発表会	2時間	教室	自分が作った多読ブックを紹介する。

自分が面白いと思った本があると、自然に他の参加者と紹介し合ったりして楽しそうに情報共有ができていた。講師は、研修参加者の様子を見ながら、コメントしたり、質問に答えたりした。それまで、日本語の本を1冊読み切ったことがないと話していた参加者も、あっという間に何冊も読み通していた。

約20分の多読体験時間の後、関西センターの多読ブックの作り方を紹介した。語彙や文法、字数、文の長さについての基準、挿絵や写真の使い方、漢字のルビ表記などのルール、そして、製本の方法などである⁽⁴⁾。

②では、学習者が異文化や自分の文化に「興味を持つ」「考える」授業を目標として、アイデアやリソースの使い方の具体例を紹介し、それを多読ブックの形にまとめた例を示した。例えば、日本の文化社会を考える例として、町でよく見かけるピクトグラムを取り上げ、種類の多様さ、見せ方の面白さを共有し、その中で「土足禁止」のような日本的なものを見つけたり、ピクトグラムができた背景を考えたりするための多読ブックを紹介した。また、町で見つけた漢字を取り上げ、ただ漢字を読ませるのではなく、主人公が温泉や買い物に行く中で営業時間や割引などの情報を読み取るというようなストーリー性を持たせることで、漢字を読む場面や目的を明示化し、推測しながら理解できる多読ブックを紹介した。そして、クイズを入れる場合には、答えがめくったページにくるようにレイアウトする見せ方の工夫なども紹介した。いずれも、異文化に対して、「何だろう」「なぜだろう」と学習者が主体的に興味を持ったり、考えたりすることをねらったものである。そして、自分たちの学生を対象に多読ブックを作ることが研修の課題であり、そのためのリソース収集を意識して、大阪オリエンテーリングや京都研修に行くように伝えた。

③は丸1日、大阪に行ってリソース収集するための大阪オリエンテーリング、④は京都での文化体験の後の半日、京都の町を自由に歩いて写真やレリアの収集を行った。

⑤では、配布した多読ブック用の Word のフォーマットに、写真を入れ、テキストを入力する作業を行った。⑤は研修開始後12日目だったが、授業までに複数の多読ブックを完成させていた研修参加者もいれば、日本語入力に慣れておらず、講師のサポートが必要な研修参加者もいた。テキストが完成すると、講師がレイアウトの崩れがないかなどを確認してプリントアウトし、それを研修参加者自身が最終確認するという手順をとった。

⑥は製本した多読ブックのテキストやレイアウトなどのチェック作業と発表用 PPT の作成を行った。

⑦では、実物投影機を使って、それぞれが多読ブックの朗読を行い、その多読ブックを作ったねらい、授業での使い方、作業の感想を紹介した後、互いが教師の立場で意見交換を行った。

3.2 研修参加者の気づきや学び

ここでは、研修参加者が作成した多読ブックの内容や多読ブック作成についての研修参加者の感想をコースアンケートの結果及び授業中の発言等から紹介する。

研修参加者が作成した多読ブックの内容とタイトルは、日本で見つけた物や体験を紹介した『たこやきの作り方』『日本のびっくりアイテム』『美味しい日本料理』、大阪の街を紹介した『くまちゃんの大阪だいぼうけん』、そして体験と友情の物語を組み合わせた『カメさんとカワウソさんー大阪アメージング・パス』である。

今回の研修では、より具体的な成果を目標として多読ブックを実際に完成させたが、「写真と簡単な文で教材が作成できるということで教材作成に自信がついた」という声があった。また、「多読のリソースは前に見たことがあったが、自分の学生のレベルに合う本があまりなかった。でも自分で作ればいいということが分かった」、「もっと多読教材を作りたい」など帰国後の活用への意欲も見られた。また、PC を使って日本語を書くことに自信が持てたと話す研修参加者もいて、様々な日本語レベルの研修参加者にも達成感が得られる活動となった。

多読ブックの内容に関しては、学生に興味を持ってもらうにはアニメやマンガを利用するのが一番いいと話していた研修参加者から、「クイズ形式の本を作ることを意識して町を歩いたら、日本には不思議なもの、すぐに何かわからないものがいっぱいあることが再発見できた。学生の視点で見ている、自分が初めて日本に来た時の驚きを思い出した」という感想が聞けた。また、漢字学習のために漢字の写真をたくさん集めていた研修参加者からは、「本の作成が課題ということで、ストーリー性や文化的な背景に注意が向くようになり、教科書に出てくる漢字だけでなく、必要な漢字や素材を意識して探して撮るようになった」という声も聞かれた。同じように、1冊の本としてストーリーを考えた結果、日本語の学習ということだけではなく、

文化的な価値観を紹介することに配慮したという意見もあった。

発表での話し合いでは、お互いの成果物を交換して使うとか、他の研修参加者のアイデアを使って多読ブックを作りたいという感想があった。例えば、どの写真にも小さいぬいぐるみを入れてストーリー性を演出したり、教師自身が写真に写りこむことで学生に興味を持たせたりする工夫は評価が高かった。さらに、発表会の聴衆からは、研修参加者5名の多読ブックで関西を紹介する本のセットができるといった提案もあった。

4. オーストラリアの大学生研修における実践

4.1 研修概要と多読ブック作成活動を含む「プロジェクトワーク」の位置づけ

オーストラリアの大学生に対する研修は、2019年10月27日から11月23日にかけての4週間の研修である。この研修には同じ大学から7名の参加があり、日本語力は日本語能力試験 N5から N2取得者まで幅広い。研修目標は、「日本語を使うことに、より自信をつける」、「日本人や日本の文化・社会について、発見・確認する」の2点が柱となっており、将来、日本語教師になる可能性がある者もいることから、「日本語教育について理解を深める」ことも目標に入っている。本研修の柱となるプログラムは、グループごとに興味関心のあるテーマについて調査し、多読ブック作成を行う「プロジェクトワーク」という科目の授業である。これまでの関西センターの多くの大学生研修でも、グループごとに興味関心のあるテーマを設定し、図書館やインターネットで調べたり、日本の人にインタビューをして、その結果をまとめて日本語で発表する活動を行ってきた。この活動を通して、日本の文化・社会への問題意識や興味、その背景について掘り下げることができたり、日本語でインタビューや発表を行うことで日本語に自信をつけたりすることができる。今回、この活動に、日本語力が高くなくても取り組める多読ブック作成活動を加えることとした。多読という学び方を知り、具体的な教材を作成してみることで、日本語教育への理解を深めることができ、研修目標を総合的に達成できると考えた。さらに、他者に効果的に日本語で伝える方法について考え、多読ブックという作品を日本語で書き上げることで、日本語を使うことに、より自信が持てると期待した。

「プロジェクトワーク」の授業の流れは、表2の通りである。①～③リソース収集活動、④～⑥多読ブック作成活動、⑦⑧まとめ、という流れになっている。

①では、「プロジェクトワーク」授業の目標や全体の流れを理解した後、2～3名の3つのグループに分かれ、テーマを考えた。この時、日本に来る前や来てから疑問に思っていたこと、驚いたことなどを出し合い、その中から1つに絞り込んだ。各グループ、「コンビニ」「自動販売機」「温泉」に決定した。次に、テーマについて知りたいこと、それはどこでどのように調査できそうかを相談し、町での観察、日本人へのインタビューの2つに分類し、フィールドワーク計画を立てた。その後、図書館に移動し、書籍やインターネットで関連ワードや情報を

表2 「プロジェクトワーク」授業の流れ

	活動	時間	場所	内容
①	リソース 収集1	3時間	教室 図書館	・グループ別にテーマを決め、フィールドワーク（観察場所やインタビュー）の計画を立てる。 ・インターネットや図書館で、テーマについて調べる。 【宿題】フィールドワークを行う
②	リソース 収集2	1時間	教室	観察やインタビュー内容をタスクシートにまとめ、さらに調査したいことを相談する。 【宿題】フィールドワークを行う
③	クラス共有	2時間	教室	観察やインタビュー結果をクラスで共有する。
④	多読体験、 多読ブック 作成説明	3時間	図書館	学習者として多読体験をした後、多読授業の進め方や学習効果、多読ブックの作り方を知る。 【宿題】多読ブックの構成を考える
⑤	多読ブック 作成	1時間	教室	多読ブックの原稿を書く。 【宿題】原稿を完成させ、講師にメールで提出する
⑥	多読ブック 製本	1時間	教室	多読ブックを印刷、製本する。
⑦	発表会準備	3時間	教室	PPTの作成など、発表の準備をする。
⑧	発表会	3時間	教室	グループ別に発表する。

調べた。これは、フィールドワークに行くからこそ分かる情報は何かを明確化する目的もあった。本研修は基本的に午後が自主活動のため、宿題として、2日間かけて自主活動の時間にフィールドワークを行うこととした。

②では、グループごとにフィールドワークでの観察やインタビューで分かったこと、自国と比較して気づいたこと、テーマやその背景について考えたことをまとめ、まだ疑問に思うことや更に調査したいことを整理した。宿題として、再度フィールドワークを行うこととした。

③では、グループごとにテーマとそのテーマにした理由、図書館やインターネットで調べた情報、フィールドワークの結果について写真を見せながら共有し、クラスでディスカッションした。

④では、まず図書館で、読む活動としての多読のルールを確認した後、学習者として多読の体験をした。学習者として体験することで、多読自体の楽しさや、多読用図書には様々なトピックやストーリー展開があることに気づききっかけとした。次に、多読授業の進め方や学習効果などを講師から紹介し、多読に対する理解を深めた。最後に、多読ブックの作り方を講師から紹介し、グループで多読ブックの構成を相談した。作成する多読ブックの読者の想定はオーストラリアの日本語初級レベルの大学生とし、テーマはリソース収集で調べたことや考えたこととした。読者を自分たちと同じ立場のオーストラリアの大学生としたのは、リソース収集の結果の何に焦点を当て、どのようなストーリー展開にすると、読者が興味を持って読んでくれるのかを想像しやすいと考えたからである。また、初級レベル対象にしたのは、N5レベルの研修参加者もいたことから、日本語力が低くても取り組めるようにするためである。この日の宿

題は、多読ブックの構成を完成させることとした。

⑤では、グループごとに多読ブックの構成をもとに原稿を書いた。原稿を書くことで、リソース収集で調べた情報や写真では足りなかったり、理解が不十分なことに気づいたり、新たな疑問が浮かんだりしたようで、各グループ、自主的に授業後に再度フィールドワークに行く計画を立てていた。宿題は、原稿を完成させて講師に提出することとした。

⑥では、完成した原稿を印刷して製本する作業を行った。

⑦では、発表用 PPT の準備や日本語での発表練習をし、⑧では、発表会を行った。発表会では、グループごとに、テーマとそのテーマにした理由、図書館やインターネットで調べたこと、フィールドワークで分かったことや考えたことを紹介した。続いて、PPT スライド化した多読ブックをプロジェクターで投影して朗読した⁵⁾後、多読ブックを通してオーストラリアの大学生に伝えたかったこと、ストーリー展開や写真、日本語のテキストなどで工夫したことや難しかったことを共有した。発表後は、質疑応答を行った。

4.2 研修参加者の気づきや学び

ここでは、研修参加者が作成した多読ブックの内容や、「プロジェクトワーク」の中で、特に多読ブック作成に関連する研修参加者の気づきや学びをコースアンケートの結果から紹介する。

各グループ、「コンビニ」「自動販売機」「温泉」のテーマに沿って取り組み、『オーストラリア人の初めてのコンビニの経験』『自動販売機 すごい!』『温泉に行きましょう!』というタイトルの多読ブックを作成した。最初の2作品は、日本とオーストラリアを比較し、同じものと日本にしかないものを紹介する内容で、最後の作品は温泉の入浴マナーについて紹介する内容である。「コンビニ」と「温泉」の多読ブックは、どちらも自分たちが主人公となって巡る展開で、読み進めることで、作者が実際に感じた驚きや発見を読者が疑似体験できるようになっている。「自動販売機」は、「どこにありますか」など問いかけて読者に考えさせるプロセスを入れており、次が読みたくなる仕掛けにしている。どの作品もリソース収集の結果を再構成して、読者の興味を引きつけて伝える工夫が随所に見られた。

多読ブック作成活動に関して研修参加者は、「本作りは楽しかった」というように活動自体を楽しみながら進めることができたようだ。そして、「本を作るとき、写真を撮り直したり、もっと違うものをたくさん撮った」「本を作る中でもう一度インタビューする必要があった。もっと理解が深まってよかった」「温泉の情報を知るために、色々な本を読んだ」というように、本という形式で誰かに伝えるためのものを作るには、より正確で整理された情報が必要となることから、制作過程でテーマについての理解が更に深まっていったことが分かる。また、「多読という学び方をおすすめしたい」というように、新しい学び方自体に興味を持つ者もいた。

5. インドネシアの大学教員、および大学生の合同研修における実践

5.1 研修概要と多読ブック作成活動の位置づけ

インドネシアの大学教員、および大学生の合同研修は、大学の教員および日本語教員志望の大学生を招へいし、日本語・日本文化についての理解を深め、日本語教授法について知見を広めること、そして人的ネットワークを形成することを目指している。その中で、多読ブック作成活動は、教員と学生の共同参加授業である「日本語を教える」の一つとして、教授法や学習方法の紹介としてだけではなく、ネットワーク形成を目的として組み込まれている⁶⁾。教員と学生が同じ課題に協力して取り組むことで、具体的な教え方や文法知識だけでなく、先輩教員と後輩教員のような関係性で教師の気持ちや実際の仕事量など、幅広い意味での日本語教育に関係する情報を交換し、将来日本語教員として互いに協力し合えるネットワーク形成に寄与することを期待した。

活動は、教員12名、学生13名を教員2名と学生の2～3名の6つのグループに分けて行った。授業の流れは、表3の通りである。

表3 多読ブック作成活動の流れ

	活動	時間	場所	内容
①	多読用図書 の紹介	20分	図書館	図書館ガイドの一環として多読コーナーを紹介してもらう。また、司書からスタンプラリー用紙を受け取る。
②	多読体験	1時間	図書館	学習者として多読授業を体験した後、多読授業の方法について知る。
③	奈良フィールドワーク 紹介	1時間	教室	・教員と学生がグループ別に奈良に行ってリソースを収集し、それを使って多読ブックを作るという活動を理解する。 ・奈良の歴史や地理を知る。
④	奈良フィールドワーク 計画	1時間	教室	グループ別に奈良フィールドワークの計画を立てる。
⑤	奈良フィールドワーク	1日	奈良	奈良でグループ別にリソースを集める。 【宿題】多読ブックの構成を考える
⑥	多読ブック 作成	3時間	教室	・多読ブックに使う写真を確認し、原稿を書く。 ・印刷して製本する。 (後半の90分は大学生だけで作業を行う。)
⑦	多読ブック 紹介準備	1時間	教室	多読ブックを完成させ、紹介の準備をする。
⑧	多読ブック の紹介	2時間	教室	グループ別に多読ブックを朗読し、多読ブックのねらいと感想を話す。

①では、図書館の司書から図書館ガイドの中で多読用図書のコーナーを紹介してもらうとともに、スタンプラリー用紙を配布してもらった。スタンプラリーは、多読用図書を1冊読むごとにスタンプを押してもらい、それを50集めると小さなプレゼントがもらえるというイベントである。

多様な研修における「多読ブック」作成の試み

②では、授業（研修開始から25日目）の前に、既に50冊読破している研修参加者もいたが、未体験の研修参加者もあり、また、授業としての多読クラスを理解してもらうために、まず学習者として20分多読クラスを体験してもらい、その後で教師の役割など、授業の進め方を紹介した。

③では、多読ブック作成活動について詳しく紹介した。作成する多読ブックの読者は日本語を学ぶ大学生とし、内容と記述に関しては、「初級レベル」「大学生が興味を持てる内容」「日本で制作するメリットを活かす」「奈良フィールドワークで写真を撮影する」「10ページ程度」という条件を設けた。そして、リソース収集や多読ブック作成という協働作業を通して意見交換を深めるといった目的を話した。特に、学生側には想定する読者の大学生が興味を持ちそうなテーマや内容について積極的に意見を出すこと、教員側には、今までの教員生活やこの研修で学んだこと、例えば、教材用写真の撮り方などを経験の浅い教員志望の学生に対して、伝えてほしいという要望を伝えた。この時間の後半には、奈良の町について歴史や地理、観光地などを簡単に紹介した。

④では、グループごとに具体的なフィールドワークの計画を立てた。

⑤では、1日使って、奈良でフィールドワークを行い、大体の多読ブックの構成をこの日に考えることがタスクだった。センターに夜に帰ってくるまで一緒に行動したグループも、夕方にはそれぞれ別行動をとったグループもあったが、全体的にグループで行動、教員と学生の意見交換ができたようだった。

⑥は全体のカリキュラムの関係で、3時間の内、最初の90分は教員と学生と一緒に活動し、テキストを作成しながら写真のレイアウトを相談した。後半の90分は学生だけで多読ブックの製本作業を中心に進めた。講師は、テキストの修正、PCのトラブル対応、レイアウト確認のためのプリントアウトの補助などを行った。完成しなかったグループは、最終原稿を講師に提出することを宿題にした。

⑦では、学生が多読ブックを完成させ、紹介の準備を行い、⑧では、グループごとに学生から紹介した。この研修では、学生、教員とも研修成果を発表する別の機会が設けられていたため、多読ブックについては、あまり堅苦しくないように、各グループ15分程度でPPTスライド化した多読ブックをプロジェクターで投影して朗読した後で、多読ブックを作ったねらいと感想を話した。

5.2 研修参加者の気づきや学び

ここでは、研修参加者が作成した多読ブックの内容や多読ブック作成活動についての研修参加者の感想をコースアンケートの結果及び授業中の発言等から紹介する。

各グループが作成した多読ブックは、交通機関の利用方法や奈良の町、社寺を案内した『一

緒に行こう、東大寺へ』『初めての奈良』『お寺と神社』、鹿に注目した『しかまるなら』『奈良は鹿しかない』、学習した語彙を基にして日本を紹介した『色と形』の6冊となった。それぞれ、ストーリー仕立て、クイズ形式、テキストのおもしろさなど、工夫がされている。

学生からは、「初級教材を作るのが難しかった」「自分が初級だった時のことを忘れてしまっている」という感想が多く聞かれた。そして、教員から初級のレベル感や写真の撮り方、ストーリーの進め方など、いろいろなアドバイスがもたらされたという声も多かった。反対に多読ブックに登場させるキャラクターや、学生が興味を持っているマンガなどの情報を教員に伝えたという声もあった。

教員からも学生からいろいろ学んだという声が多かった。例えば、学生が興味や関心を持っていることについての情報だけでなく、学生が文章を具体的にどのように書くのか見られたので作文の授業の参考になると話す者もいた。また、多読ブックのような成果物を作る効果を感じたので、自分の授業でも取り入れたいという声もあった。

また、ある学生は、「普段は教員と学生という意識が強くて自由にいろいろなことを話すことは少なく、どんなことを話したらいいか分からなかったが、教員と同じ体験をしたことで、それについて話すことができ、とても話しやすくなった」という意見もあった。

多読ブック作成活動を通してお互いに学んだり教えたりすることがあり、協働作業が相互理解を進める場になったことが窺える。

6. おわりに

多読ブック作成活動を行う目的は研修ごとに異なるが、共通していることは、何より研修参加者が主体的に楽しみながら取り組む姿である。この活動には、自分たちが見たり聞いたりしたことをまとめて、誰かを喜ばせたり驚かせたりする楽しみやワクワク感がある。

本報告で紹介した3研修では、多読ブック作成活動を「日本語教員である研修参加者が、収集したリソースをどのように授業や教材に活用するのかを具体的に考える」「日本語学習者である大学生の研修参加者が、日本語を使うことに自信をつけつつ、日本の人や日本の文化・社会についての理解を深める」「日本語教員と大学生という異なる背景を持つ研修参加者が、互いの強みを活かして学び合いながら協働で作業することを通してつながりを強化する」といった研修目標を達成するための手段として取り入れた。

多読ブック作成活動が、研修目標に合わせて様々な現場で応用して取り入れやすいのは、この活動自体が持つ特徴にある。

まず、多読ブック自体が持つ性質にある。多読ブックは、絵本のようなものであり、誰もが幼いころから慣れ親しんできている媒体で、作品としてイメージしやすい。表現方法は多様で、ストーリー展開やレイアウト等、工夫やアイデアを詰め込めるため、個性を発揮しやすい。ま

多様な研修における「多読ブック」作成の試み

た、身近な文書作成ソフト Word を使って、写真とテキストだけで作成できるので、編集等の専門的な知識が必要ない。A1レベルのものからあり、テキストは短く、簡単なものでも作品として十分成り立つため、日本語力が低くても取り組める。

次に、多読ブックを作成するプロセスも関係する。多読ブックというのは、本という作品であることから、具体的な読者を想定して作成することが前提である。作成する多読ブックのテーマを決め、関連するリソースを収集し、構成を考えて原稿を書く中で、何度となく、想定する読者に伝えたいことは何か、それを伝えるために自分自身は十分にテーマについて理解できているのか、また情報を整理できているのか等、新たな疑問や理解の不十分さを自覚する。こういったプロセスを経て多読ブックという作品として完成させるため、対象への理解が深まりやすいだけでなく、自分たちで気づき、考え、主体的に行動する仕掛けがこの活動にはある。また、この活動は、個人でも可能であるが、グループでも取り組みやすい。そのため、メンバー間で意見交換し、互いに学び合いながら協働して作り上げることができる。

このような特徴を持つ多読ブック作成活動は、国内外の様々な現場で応用して取り入れることができるのではないだろうか。

謝辞：関西センターの東健太郎日本語教育専門員副主任には、多読授業や多読ブック作成活動の進め方について資料の提供、授業への出講等の協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

〔注〕

- ^① 多読用図書の作成活動の実践報告はまだ数少ないが、多読授業での多読に対する意欲の低下や読みたい物がない等の課題を解消するため、学習者自身が多読の読み物を作成する実践（山岸ほか 2019）や、多読授業の最後のプロジェクトで、自己表現活動の一環として多読本創作をする実践（池田 2018）の報告がある。
- ^② 「KC よむよむ」は、関西センターの日本語教育の取り組みを紹介している「KC クリッパーそのまま見せませす！私たちの日本語教育」内で公開している（<https://kansai.jpf.go.jp/clip/yomyom/>）。
- ^③ 関西センターの取り組みの詳細は、東（2018）、東・畠中（2019）を参照のこと。
- ^④ 多読ブックの作成手順の詳細は、東（2016）を参照のこと。
- ^⑤ 多読ブックのPPTスライドは、見開きで1スライドとし、「画面切り替え」の「ページ カール」を設定して、実際に本をめくっているような効果を出した。
- ^⑥ 前年度は、協働作業としてスマートフォンを利用して「会話ビデオ」を作成した。しかし、こちらが期待した以上の質のものを作ろうとして、作業量負担が大きく、時間がかかったこと、ビデオの編集は学生と教員の知識や技術の差が大きく、協働作業がしにくかったことなどの課題が残った。そこで、作業負担を軽くすること、協働作業をしやすくすることを主眼として、「多読ブック」を作成することにした。前年度の実践については、戸田・田中・和栗（2020）を参照のこと。

〔参考文献〕

- 東健太郎（2016）「日本語教育通信 授業のヒント 入門初級レベルのオリジナルの本を作ろう」
<<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/hint/201601.html>>（2020年8月21日）
東健太郎（2018）「多読教材『KC よむよむ』の開発と多読授業の実践」日本語プロフィেশンシー研究学

- 会 第3回例会<<https://kansai.jpf.go.jp/clip/yomyom/tadoku2018a.pdf>> (2020年8月21日)
- 東健太郎・畠中朋子 (2019) 「国際交流基金関西国際センターにおける日本語多読の実践—司書と教師の協働から—」西澤一他編著『JLA 図書館実践シリーズ 40 図書館多読のすすめかた』151-156、日本図書館協会
- 池田庸子 (2018) 「多読から創作へ—中級日本語学習者を対象とした多読授業における試み—」『日本語教育方法研究会会誌』Vol.25 No.1、8-9
- 戸田淑子・田中哲哉・和栗夏海 (2020) 「教員・学生合同研修での交流・協働による気づきや学び—東南アジア日本語教員養成大学移動講座 (インドネシア) 研修での実践—」『国際交流基金日本語教育紀要』16、87-98
- 山岸愛美・秋田美帆 (2019) 「学習者による多読のための読み物作成の意義—初級後半クラスでの実践から—」『早稲田日本語教育学』27、37-41